

初めから濱田君の思ひつきに賛成してゐたのであるが、さりとしてそれが行き過ぎると、遠からずして厭氣がさすであらうことをも恐れてゐた。しかし今回君がこれに熱中してゐる最中にそんな點に注意すると、必ず反撥して無理にもその考を通さうとするに違ふことを知つてゐるので、ある時いさゝか逆手を使つた積りで、折角かういふ形にするなら、もう一層調子を強めて、例へばアルケード式の廊下の如きも、もつと本式のものにしたらというたところ、妙な表情をして引取つた。ところがそのつぎには却つてそれが穩かな調子になつて、大概今のやうな形に直されてあつた。こちらが逆に繰られたのかも知れない。こんな有様で大體の考もまとまつたので、五月五日には博士邸で三人が集り、工學部の武田教授に設計を依頼することに定め、早くもその二十二日には同教授の部屋で、研究室の割方を始めプランの大概をきめ、七月八日にはこの建築工事に主任として従事してもらうことになつた東畑氏も參加して、大略の設計圖について説明も聞き注文もする段取に進んだ。武田教授が濱田君を始め素人の吾々の注文を嫌な顔もせず、出來得る限り素直に受け入れて、折角出來上つた下圖に惜氣もなく鉛筆や消ゴムを加へられたことは、東畑氏の熱心さと共に、吾々の深く感謝したところであつた。かく製圖作業の進行してゐる中に、如何なる事情であつたかは今記憶しないが、外務省から建築の速成を求めて來たので、出來得る限り工程を急いでもらひ、翌昭和五年一月十一日に地鎮祭を修し、その後従業員諸氏の格別の努力によつて美事に竣工を見、遂に十一月九日に開所式を擧げるに至つたのである。

開所式當日の博士の晴々しい様子は、濱田君とも語り合つたやうに、一同の目につく程著しく、參加の多數の來賓を前にしての雄辯の挨拶にも、満足と希望との溢れてゐるのが感じられた。恐らくは博士の生涯を通じての數々